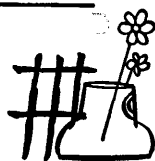


巻頭言



情報処理ビルディングは建つか

福井 隆 夫†



学会活動と会員サービスのあり方として、つまり魅力ある学会の条件として、私見ではあるが三つの局面が考えられる。

その第一は、会員が真に必要なとしている情報を得、それについて論議できる「場」が提供されること、第二は、学会における諸活動が、会員が所属する機関における業務遂行と密接なかかわりをもっていること、第三は、会員になることによって特別なサービスが受けられることである。

第一の課題に対しては、理事会の下に Relations 検討委員会を設置して検討中であるが、当学会研究会の活発化を第一義としながら、電気部門を軸とする 5 学会連合大会だけに偏らず、ソフトウェア、人工知能、認知科学、基礎、数学、人間工学、心理、行動計量など広い分野に着眼して、他の情報関連学協会との連携強化や IFIP との関係整理を含む国際活動の活性化を目指すことで、情報処理の多面的な情報取得と論議の場が期待できることとなる。

第二の課題に対しては、大学・研究機関や特定大企業指向だけでなく、幅広い情報処理関係者への裾野の広がりを意図したサービスのあり方が検討命題となる。機関誌の強化、拡大あるいは第 2 情報処理機関誌の検討も有効と思われる。しかし、この命題に対しては過去の伝統と品位を重視して、3 万人レベルの会員規模で留まるべきか、10 万人レベルの会員規模を目指したオールラウンド情報処理学会に向かうべきか、関係者の議論を呼ぶところである。

第三の課題が最もむづかしい。いろいろなサービス内容が考えられる。例えば、情報提供サービスである。会員からの照会に応じて文献、特許、研究機関、専門家などの情報を提供する。また、教育・啓蒙サービスがある。各種の講演会、シンポジウム、パネルディスカッション、見学会などの企画、個別教育コースの開講などである。あるいは、生活上の一般サービスも考

えられる。図書館、会議場所、ホテル、書籍などの割引利用などである。他にもいろいろある。問題は、三つの課題に対する組織、体制、環境である。関係する組織や事務局の機能増強、情報通信技術を駆使した運営方法、情報処理学会会員サービスにふさわしい環境条件の整備などなど検討事項が多い。

1990 年は情報処理学会の 30 周年目に当たる。この年を契機に次世代への飛躍を目指して「情報処理学会 30 周年記念事業」を企画中である。記念式典、国際会議、未来検討、全国大会、30 年史、記念論文などの記念事業を考えており、必要基金の募金運動も展開することとしている。

30 周年記念事業の一つである未来検討委員会において、情報処理学会の将来展望を明確にし、その実現方策を樹立することとしている。検討の中核課題は学会活動の今後のあり方、関連学協会、関連産業界との協力・協調のあり方、望まれる環境条件のあり方である。特に、環境条件のイメージについては「総合的な情報処理ビルディング」の構築もしくは確保を目指している。ここは情報処理に関するコミュニティセンターであり、ビル自体が総合的な情報処理技術で運営される……。ビルの確保は限りなくハード面の指向であって中味が問題であると指摘されよう。もちろん、学会活動の未来像に焦点を当てたソフト面の課題解決と内容充実がきわめて大事である。しかし、ハード面、ソフト面の両輪が揃って、始めて豊かな学会の未来があるとも思われる。

いずれにせよ大事なことは学会は会員のためのものである。学会の使命はあくまで会員相互の啓発と時代の先導役機能をあわせもちながら、日本の将来と国際化に貢献してゆくことであると考え。スケールのでかい貢献をしてゆくために、はたしてスケールのでかい「情報処理ビルディング」が建てられるだろうか。

(昭和 63 年 1 月 15 日)

† 本会理事 大同信号(株) (元 JNR)